

2025年12月22日(月)
東洋大学大学院経済学研究科
日本経済史B

大塚啓二郎『高付加価値農業地域の発展：
日本および発展途上国における生産者協同組合の役割』*

担当：岸本康佑**

Abstract

野菜、フルーツ、家畜といった高付加価値農業生産物(HVPs)は、工業製品のように品質のブレが大きい。しかし、品質と同様に HVPs の安全性を小売業者や消費者がすぐに見分けることは難しい。製造業の集積のように、イノベーションが農業地域の発展の鍵を握っている。それゆえ、生産者協同組合は新技術の導入において重要な役割を果たし、マーケティングの情報を得て、HVPs の品質を保証しなくてはならない。本章では、製造業と農業地域の間の成長経路の類似性だけでなく、生産者協同組合が果たす役割についても示す。発展途上国における農業地域発展に向けて歴史的経験から教訓を引き出すことを目的として、本章は、戦前日本におけるリンゴ産地の発展経験を検討し、それをアジアおよびサブサハラ・アフリカ(サハラ以南アフリカ)における多数の農業地域の同時代的発展と比較する。

1. Introduction

- HVPs とは？
 - ・ 農業は主食作物と高付加価値農業生産物(High-Value agricultural Products: HVPs)に分けられる
 - ・ 穀物は品質に差があまりないが¹、HVPs は品質や安全性にバラツキがある
 - ・ 発展途上国で新しい HVPs が導入されても、育て方を知らず、改良種子・化学肥料・安全な殺虫剤・信用へのアクセスが不足 ⇒ 途上国の HVPs 市場は、不完全か、不在
 - ・ HVPs の所得弾力性は大きい

* Otsuka, Keijiro. (2013), "Development of High-Value Agricultural Districts: The Role of Producer Cooperatives in Japan and Developing Countries", *Industrial Districts in History and the Developing World*, Chapter 7(pp. 101–114), Springer.

https://link.springer.com/chapter/10.1007/978-981-10-0182-6_7

** 東洋大学 経済学部 経済学科。

s12102301404@toyo.jp, kishimoto.research@gmail.com

¹ コメは例外。

- 高所得国のスーパーに輸出できる
⇒ 潜在的な成長産業であり、途上国の貧困削減に貢献できる
 - 日本のような高所得国では、どのようにHVPsが発展してきたのか？また、途上国でHVPsを発展させるには？
 - **契約農業(contact farming)**
 - 請負業者であるスーパーマーケットが、信用のある農家に技術支援
 - リターンとして、農家は一定の量・品質の生産物を、期日通りに届ける
⇒ 請負業者の生産過程の監視コストがかからない
 - 価格は事前固定か、市場価格
 - ⇒ 農家の価格リスク削減
 - ⇒ 契約農業は、市場の不完全性や不在による問題を軽減
 - 契約農業は、工業での問屋制(putting-out)に基づく契約と似ている
 - 契約農業は取引コストが大きい
 - 農家が勝手に作る作物を変えたり、肥料など提供したモノを転用・転売する可能性がある
⇒ 少数の大規模農家と契約する方がいい
 - ⇒ 契約農業は、農業の近代化や効率性向上と親和性があるが、大規模農家に有利なため公平性に問題がある
 - 取引コストは生産者協同組合(producer cooperatives)で抑えられる
 - 社会関係資本(social capital)によって、生産の監視、請負業者との直接契約、品質や安全性の保証ができる
 - 逆に、契約農業がない状況下では、生産者協同組合は新しい作物や生産方法の導入などを阻害する
 - 本論文の概要
 - 日本や発展途上国におけるHVPsの発展に対する生産者協同組合の役割を説明
- 第2節：なぜ、(HVPsを含めて)小規模な家族経営の農家が多いのか？
- その中で、なぜ、HVPsの発展に生産者協同組合が重要なのか？
- 第3節：HVPsの成功例として、日本のリンゴ産業における生産者協同組合の役割
- 第4節：アジアやサブサハラ・アフリカの発展途上国での生産者協同組合役割
- 第5節：先進国におけるHVPsの発展から考えられる政策インプリケーション

2. 家族経営農家の優勢と契約農業の登場

(Dominance of Family Farms and Emergence of Contract Farming)

- なぜ、世界中で家族経営農家が多いのか？

- ・ 農地が大きくなると、労働者の監視コストや生産環境が多様化(低所得国で顕著)
 - ⇒ 農業は労働集約が機能しない(規模の不経済(scale diseconomies))
 - ⇒ 農業生産が家族経営に
- 契約農業の登場
 - ・ スーパーマーケットといった非農業会社は、自前の大規模な農地を持つよりも、家族経営の農家と契約する方を好む
 - ⇒ 労働市場の失敗を回避できる
 - ・ 情報の非対称性(information asymmetry)を減らすため、HVPs の品質や安全性に関して、生産者・小売業者と消費者・スーパーマーケットの間の保証ができている
- 生産者協同組合の登場
 - ・ 契約農業はプランテーションや大規模農業より、効率的だが、高コスト
 - ・ 実証研究では、契約農業の初期段階では大規模農家を契約相手として選んだほうが、取引コストを抑えられる
 - ・ しかし、小規模農家も契約農業をするために、生産者協同組合を作るようになる
 - ・ 仮説：「生産者協同組合は、大手代理店と小規模農家間の契約農業の増加に貢献した」
- 契約農業の特徴
 - ・ 1990年代以降、HVPs の品質や安全性に対する消費者の関心やスーパーマーケットの成長に押されて、発展途上国では契約農業が一般的に
 - ・ 工業の問屋制²のように、物資・技術・マーケティングを請負業者が提供する
 - ・ 文献レビューによると、発展途上国の中規模農家は、契約農業によって、生産技術は学んでいるが、マーケティングは学べていない
- 契約農業は、問屋制工業のように、統合型生産システムに置き換わるのか？
 - ・ Our answer is negative.
 - ・ アメリカでは、契約農業の下で農地を拡大
 - ・ ラテンアメリカでは、民間企業が統合型生産システムではない、機械を導入した大規模な農地を運営
 - ・ 発展途上国では、契約農業の下で農家規模が拡大している兆候はほとんどない
 - ・ 問屋制工業は、規模の経済があるのに対し、
契約農業は、規模を大きくすると、労働者の監視コストが高くなる(規模の不経済)
 - ・ 契約農業を通して、小規模農家が HVPs を生産できるかは、生産者協同組合の強さにかかる

² 歴史的に見ると、問屋制は工場システムに置き換わっていった。その理由として、大規模機械の導入、労働の細分化、労働者の監視コストの低下によって、規模の経済が働いたことによる。また、横領も重要な原因の一つである。ここでの横領は、契約農業において、肥料など与えられたモノを他の目的に転用することと、概念的に同義である。

3. 戦前日本におけるリンゴ生産地域の歴史的発展

(Historical Development of Apple-Growing Districts in Prewar Japan)

- 武田(Takeda)のリンゴ生産者協同組合
 - ・ 物資の協同購入と、生産物の共同販売
 - ・ 生産物を生産者協同組合が指定した、信頼できる現地代理店や都会の卸売業者に売る
 - ・ 生産者協同組合の小売店が大きな街にある
 - ・ 剪定・除草・害虫や病気の管理のガイドラインがある(=技術支援)
 - ・ 生産物の品質を専門家らが評価し、低品質だった場合は改善策が与えられる
 - ・ 生産者協同組合の信用を使い、銀行や信用組合からお金を借りられた
 - ・ 生産者協同組合の役割は、契約農業での請負業者の役割と本質的には同じ
違う点は、生産者協同組合の意思決定は農民が行うが、契約農業は請負業者が行う点
 - ・ リンゴの等級化とブランディングを行う
- 武田のリンゴ生産者協同組合の失敗
 - ・ 仲買人間の競争により、生産者協同組合員に直接接觸して高値を提示するようになり、横流しが横行するようになった
∴ 生産者協同組合でのサービス費用を賄うため、価格が市場価格よりも低かったから
 - ・ 発展途上国において、購入者間の競争は横流しを拡大させる
⇒ 「競争」と「契約農業」は両立しない
 - ・ 横流し行為は罰しにくい
∴ 生産者協同組合の運営において、メンバーシップを取り上げてしまうと、参加者がいなくなってしまうから
- 第3節のまとめ
 - ・ 小規模農家がHVPsを作ったり売ったりするために、物資の調達・技術支援・生産物の品質保証を行う生産者協同組合を設立する必要がある
 - ・ 生産者協同組合が契約農業より優れている点は、報酬が生産者協同組合と協同組合員にもたらされること
 - ・ 合意違反したときに罰する仕組みが弱いので、生産者協同組合だけでは、高品質の生産を維持できないかもしれない

4. 発展途上国における契約農業と生産者協同組合

(Contract Farming and Producer Cooperatives in Developing Countries)

- なぜ、小規模農家が契約農業に参加しているのか？

- ・ 小規模農家の取引の少なさによるハンデに打ち勝つため、取引コストを減らし、一定量で期日通りの高品質で安全な生産物の供給が必要
- 小規模農家の生産者協同組合には2種類ある
 - ・ 仲介者タイプ(the intermediary type)
 - ・ 生産者組合員に代わって、物資を調達し、生産物を販売する
 - ・ 武田の生産者協同組合の共同販売と似ている
 - ・ ファシリテーター・タイプ(the facilitator-type)
 - ・ 技術支援のための、請負業者と小規模農家の意思疎通を円滑にする
 - ・ 武田の生産者協同組合の生産管理のための技術支援と似ている
- 生産者協同組合は、高度な生産技術が不足している
- ⇨ 契約農業が、請負業者が生産を管理する生産契約から、請負業者が特定の投入財の使用や生産方法を指定するマーケティング契約へと発展してきたため
- ・ 代わりにNGOが技術サービスを提供(効果の評価をした文献はない)
- 契約農業は生産者協同組合と組み合わせれば、所得を増やすが、多くの国で、生産者協同組合の普及は限られていると報告されている
 - ・ 理由1:研究バイアス?
 - ・ 研究者が生産者協同組合の成功例ばかりに注目している可能性
 - ・ 理由2:生産者協同組合の運営は採算が取れておらず、多くが政府による支援を受けているから?
 - ・ 理由3:武田の生産者協同組合でも問題になったように、生産者協同組合は社会的には有益だが、高コストであるから?
 - ・ もし、これが理由なら、政府が介入する余地がある
- 生産者協同組合が存立可能かつ収益性を持ちうる条件について、十分に解明した研究は存在しない

5. Concluding Remarks

- 製造業と高付加価値農業の生産者協同組合には類似性がある
 - 情報の非対称性や市場の不在・不完全性といった問題は、生産者協同組合が解決しなければならない
 - 戦前日本の生産者協同組合と現代の発展途上国には類似性があるが、起業家の役割を誰が担うかという点が違う
 - ・ 契約農業の場合、起業家の役割を果たすのは請負業者やスーパーマーケット
 - ・ イノベーションを伴う契約農業の便益は、起業家ではない小規模農家にはほとんど帰属しない
- ⇒ 農家の起業家精神が發揮される余地はほとんど存在しない。

2025年12月22日(月)
東洋大学大学院経済学研究科
日本経済史B

- ⇒ マーケティングに関する研修を通じた小規模農家の人的資本形成への投資が必要
- ⇒ 研修によって、武田のリンゴ生産者協同組合を悩ませた横流しの問題も、防止されるか、少なくとも大幅に緩和される可能性がある

論点

- ① 契約農業は、少数の大規模農家と契約する方がいい(p.102)し、先進国では大規模農家の方が小規模農家よりも契約農業に積極的に参加している(p.108)にも関わらず、なぜ発展途上国ではそうなっていない(p.104)のか？
移行への途上なのか、移行できない構造的要因があるのか？
- ② 「東京牛乳搾り組合」(前田 2025: 27)など、酪農産業にも生産者協同組合は存在したと思うが、武田のリンゴ生産者協同組合のような特徴はあるか？
- ③ 穀物は品質に差があまりないが、例外としてコメが挙げられている。なぜ、コメは品質の差がある(もしくは差が意識される)のか？